

# 第一

拙者親方とおやかた もう  
おたちあい うち  
御立会の内に

ござんじ おかた ござ  
御存知の御方も御座りましようが、

おえ ど た にじゅうりかみがた  
御江戸を発つて二十里上方、

そうしゅうおだわらいっしきまち おす  
相州小田原一色町を御過ぎなされて、

あおもちよう のほ  
青物町を上りへ御出でなさるれば、

らんかんぼしとらやとうえもん  
欄干橋虎屋藤右衛門、

ただいま ていはついた  
只今では剃髪致して

えんさい なの  
圓齋と名乗りまする。

がんちよう おおつごもり  
元朝より大晦日まで

おて い こ  
御手に入れまする此の薬は、

むかし ちん くに とうじんういろう ひと  
昔、珍の国の唐人外郎と云う人、

我が朝へ来たり。

帝へ参内の折から

此の薬を深く込め置き、

用うる時は一粒ずつ

冠の隙間より取り出だす。

依ってその名を帝より

「透頂香」と賜る。

即ち文字には

頂き・透く・香と書いて

透頂香と申す。

只今では此の薬、

殊の外、世上に広まり、

方々に偽看板を出だし、

イヤ小田原の、灰俵の、

さん俵の、炭俵のと

色々いろいろに申せども、

平仮名ひらがなを以もって

「ういろろ」と記しるせしは

親方おやかた圓齋えんさいばかり。

もしや御立会おたちあいの内にうち、

熱海あたまか塔とうノ沢のさわへ

湯治とうじに御出おでなさるるか、

又はまた伊勢御参宮いせごさんぐうの折おりからは、

必ずかなら門違かどちがいなされまするな。

御上おのぼりなれば右みぎの方かた、

御下おくだりなれば左側ひだりがわ、

八方が八つ棟、面が三つ棟、玉堂造、

破風には菊に桐の臺の

御紋を御赦免あつて、

系図正しき薬で御座る。

## 第二

イヤ最前より

家名の自慢ばかり申しても、

御存知無い方には

正真の胡椒の丸呑み、

白河夜船、

されば一粒食べ掛けて、

その気味合いを御目に掛けましょう。

先ず此の薬を斯様に一粒

舌の上に乗せまして、

腹内へ納めますると、

イヤどうも言えぬわ、

胃・心・肺・肝が健やかに成りて、

薫風喉より来たり、

口中微涼を生ずるが如し。

魚・鳥・茸・麴類の食い合わせ、

その他万病即効在る事神の如し。

さて此の薬、

第一の奇妙には、

舌の廻る事が

銭ごまが裸足で逃げる。

ヒヨツと舌が廻り出すと

矢も盾も堪らぬじや。

第三

そりやそりやそらそりや、

廻って来たわ、廻って来るわ。

アワヤ喉、サタラナ舌にカ牙サ歯音、

ハマの二つは唇の軽重。

開合爽やかに、

アカサタナハマヤラワ、

オコソトノホモヨロヲ。

一つへぎへぎに、へぎ干し・はじかみ、

盆豆・盆米・盆牛蒡、

摘蓼・摘豆・摘山椒、

書写山の社僧正。

小米こしめの生なま噛がみ、小米こしめの生なま噛がみ、

こん小米こしめのこ生なま噛がみ。

繻子しゆす・緋繻子ひじゆす、繻子しゆす・繻珍しゆちん。

親おやも嘉兵衛かへい、子こも嘉兵衛かへい、

親おや嘉兵衛かへい・子こ嘉兵衛かへい、

子こ嘉兵衛かへい・親おや嘉兵衛かへい。

古栗ふるくりの木きの古切ふるきり口くち。

雨合羽あまがつばか番合羽ばんがつばか。

貴様きさまの脚絆きゃはんも革脚絆かわきゃはん、

我等われらが脚絆きゃはんも革脚絆かわきゃはん。

尻革袴しつかわばかまのしつ綻ぼびを、

三針針長みはりはりながにちよと縫ぬうて、

縫ぬうてちよとぶだん出だせ。

河原撫子・野石竹、

野良如来、野良如来、

三野良如来に六野良如来。

一寸先の御小仏に

御蹴躓きやるな、

細溝にどじよによるり。

京の生鱈、奈良生真名鱈、

ちよと四五貫目。

御茶立ちよ、茶立ちよ、

ちやつと立ちよ。茶立ちよ、

青竹茶筥で御茶ちやつと立ちや。

#### 第四

来るわ来るわ何が来る、

高野こうやの山やまの御柿おこけら小僧こぞう、

狸たぬき百匹ひゃつびき、箸はし百膳ひゃくぜん、

天目てんもく百杯ひゃつぱい、棒ぼう八百本はっぴやっほん。

武具ぶぐ、馬具ばぐ、武具ぶぐ馬具ばぐ、三武具みつぶぐ馬具ばぐ、

合あわせて武具ぶぐ馬具ばぐ、六武具むぶぐ馬具ばぐ。

菊きく、栗くり、菊きく栗くり、三菊みきく栗くり、

合あわせて菊きく栗くり、六菊むきく栗くり。

麦むぎ、塵ごみ、麦むぎ塵ごみ、三麦みむぎ塵ごみ、

合あわせて麦むぎ塵ごみ、六麦むむぎ塵ごみ。

あなげしの長なが押おしの長なが薙なぎ刀なたは

誰たが長なが薙なぎ刀なたぞ。

向むここううの胡麻ごま殻がらは

荏えの胡麻ごま殻がらか真ま胡麻ごま殻がらか、

あれこそ本の真胡麻殻。

がらびいがらびい風車。

起きやがれ小法師、

起きやがれ小法師、

昨夜も溢してまた溢した。

たあふほほ、たあふほほ、

ちりからちりから、つつたつぽ、

たつぽたつぽ一干蝟。

落ちたら煮て食お、

煮ても焼いても食われぬ物は、

五徳・鉄灸、金熊童子に、

石熊・石持・虎熊・虎鱧。

中なかでも東寺とうじの羅生門らしやもんには、

茨木童子いばらぎどうじが腕栗うでぐり五合ごんごう掴つかんでおむしやる、

彼かの頼光らいこうの膝元ひざもと去さらず。

## 第五

鮎ふな・金柑きんかん・椎茸しいたけ・定さだめて後段ごだんな、

蕎麦そば切りぎ・素麵そうめん、

饅頭うどんか愚鈍ぐどんな小新こしん発知はち。

小棚こだなの小下こしたの

小桶こおけに小味こみ噌そが小有こあるぞ、

小杓こしゃく子し小持こもって

小掬こすくって小寄こよこせ。

おつと合点がてんだ、

心得こころえ田圃たんぼの

川崎・神奈川・程ヶ谷・戸塚は走って行けば、

灸を擦り剥く三里ばかりか、

藤沢・平塚・大磯がしや、

小磯の宿を七つ起きして、

早天早々、

相州小田原、透頂香。

隠れ御座らぬ貴賤群衆の、

花の御江戸の花ういろう。

アレあの花を見て、

御心を御和らぎやと言う、

産子・這子に至るまで、

此の外郎の御評判、

御存じ無いとは

申もうされまいまいつぶり、

角つのだ出せ棒ぼう出せぼうぼう眉まゆに、

白うすき杵すり播ば鉢ちばちばち桑原ぐわら桑原ぐわら桑原ぐわらと、

羽は目めを外はずして今日こんにち御出おいでの何いずれ茂も様さまに、

上あげねばならぬ、売うらねばならぬと、

息いきせい引ひつ張ばり、

東とう方ほう世せ界かいの薬くすりの元もと締じめ、

薬やく師し如に来よららいも照しょう覧らんあれと、

ホホ敬うやまって外うい郎ろうはいらっしやりませぬか。